

「逃げですか？」

「ああ、君と専属契約を結んでからここ数日、君の身体能力や走りの特徴についての情報を整理、分析した結果だ。君には逃げが一番合っていると少なくとも俺はそう確信している。」

「…トレーナーがそう考えられた理由をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「もちろん、言われなくても説明させてもらうつもりだよ。先ずラシヨウモン、君というウマ娘は体格があまりに小柄過ぎる。これはレースにおいて致命的とは言わないけれど大きな不利足りえる要素だ。それは理解しているよね？」

「はい。」

「では、なぜ小さな体格がレースにおいて不利かと言われるかは？」

「レース中に例えば先頭集団にいたとして内に押し込まれた場合、バ群を押し割って出てくるなどが難しくなるからでしょうか？」

「そうだね。どれだけ小柄であろうとウマ娘である以上は人などよりは図抜けた力を持っているけれど、人だって個体差があるようにウマ娘だって個体差はある。そして小柄なウマ娘というのは総じて力が並み以上の体格を持つウマ娘と比べれば弱いことが多い。もちろん例外はあるけれどね。」

「…」

「差しや追い込みはどうしたって他のウマ娘を押しつけて走ることが必要な場面が多くなる。毎回毎回、大外を回すわけにもいかないからね。先行は差しや追い込みと比べればそういう危険は減るけど、それでも周りを囲まれる可能性は十二分にある。そして君はそういう囲まれた状態から割って出てきて勝ち切るだけの力がない。それはこれまでの授業でも痛感してきたんじゃないかな？」

「そうですね。集団に飲み込まれたレースはそのまま何もできずに終わることがほとんどでした。」

「もちろん。小柄な体格を活かして他のウマ娘達の間を縫って走るようにして抜け出すこともできるだろうけど、そんな曲芸じみたことが毎回上手くいくわけがない。他にも小柄であることの不利はいくらでもある。ポジション争いでもどうしたって遅れを取りやすいし、集団の中で揉まれた場合の体力消費は体格がいいウマ娘と比べて大きい。小柄であることが不能であるとまでは言わないけれど、不利なのは覆しようがない事実だ。小柄というだけで評価が少し下がるのは、こういった明確な不利が走る前からわかりきっているからだね。」

「続けてください。」

「ただ君には幸いにもこういった不利を補って余りあるだけの武器がある。そのずば抜けた加速性能だ。このデータを見て欲しい。」

「これは…」

「ここ数日、君の練習を見る中で記録しておいた君の1ハロンまでの到達時間だ。そしてこれがトレーナー仲間に協力して集めた君の同期達や先輩ウマ娘達の記録。見比べてみればよくわかるだろ君の速さが！他のウマ娘達が集団を形成し始めた瞬間、君はもう一歩分先にいる。小柄ゆえの身軽さと君自身が持って生まれた天性のスピードによって成立する。反則的なまでの加速性能とそれによって成立するロケットスタート、これを活かすなら逃げ以外ないんだよラシヨウモン。逃げならバ群で揉まれることもバ群を割る必要もないから小柄という君の不利は消え去る。まあ、君に逃げが一番向いていると思う理由はこれじゃないんだけどね。」

「?これ以上の何かがあるのですか?」

「ああ、だって逃げはカメラで一番撮りやすいだろう?」

「!…成程それは確かに私にピッタリですね。」

「君がなぜそこまで自分の走りを記録することに拘るのか、俺はまだわからないし君から話してもらえとも思えない。けど、あの時の約束は絶対だ。世界が終わるまで俺は君を撮り続ける。」

「…ええ、そうでなくては困ります。あなたは私のトレーナーなのですから、少なくとも今のところはですが。」

「…ああそれで構わない。さあ、今日の練習を始めようかラシヨウモン。君の速さを世界に示そう」

「そうですね。トレーナーさん。…私の姿をあの人達に届けるためにも」

『ラシヨウモンだ!ラシヨウモンだけが最終直線!ほかのウマ娘はまだはるか後方!これはもう無理!これはもう無理!ラシヨウモンだ!ラシヨウモン一着!ジュニア級ウマ娘がコースレコード更新!これはとんでもないことになったぞ!』

「…見えていますかお母さん。先ずは一つです。」

(これだけのレースをしたのに驚くほど落ち着いている…これは良い事とみるべきかそれとも…)

ウマ娘 ピオニエーレネロ 第1R 「ラシヨウモン逃げ始め」